おくのほそ道

平泉　―　現代語訳　―

藤原氏三代の輝かしい栄えも一睡の夢のようにはかなく消えて（今は廃墟になってしまった）、当時の表門の跡は一里ほど手前にある。秀衡の（館の）跡は田や野になっていて（昔の面影はなく）、ただ金鶏山ばかりが（昔の）形を残している。まず高館に登ってみると（眼下に北上川が見下ろされるが）、北上川は南部地方から流れてきている大河である。衣川は和泉が城を巡って、高館の下でこの大河に流れ込んでいる。泰衡らの旧跡は、衣が関を隔てて（向こうにあり）南部地方への出入り口を堅く守り、蝦夷（の侵入）を防ぐと見える。それにしても（義経は）忠義の士たちをよりすぐってこの高館にたてこもり、功名（手柄を競って戦ったのだが、それ）も一時のことで（今ではその跡は茫々たる）草むらとなっている。「国は乱れても山河だけは昔に変わらず残っている。都城は（荒廃しているが）春が訪れて草木だけは昔のとおり青々としていることよ。」と（杜甫の詩を思い出して共感し、）笠を敷いて（腰を下ろし）、いつまでも懐旧の涙を流したのであった。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房身ゆる白毛かな

前々から話に聞いて（その立派さに）驚いていた（経堂・光堂の）二堂が開かれている。経堂は（清衡・基衡・秀衡の）三代の将軍の像を残しており、光堂はこの三代の棺を納め、（阿弥陀・観音・勢至の）三尊の仏を安置している。（かつては、柱などを華麗に飾っていた）さまざまな宝物も散りうせて、珠玉を散りばめた扉も（長い間の）風に傷んで、金箔を塗った柱も霜や雪のため朽ちて、もう少しでみな崩れ落ちて何もない草むらとなってしまうはずだったが、四方を（鞘堂を造って）新しく囲み、屋根に覆いをして風雨から守るようにして、（これで）しばらくの間は千年の昔をしのぶ記念（の建物）となって残ることになった。

五月雨の降り残してや光堂